

横浜市立 瀬戸ヶ谷小学校 学校評価報告書 (令和 4 年度)		
重点取組分野	令和 4 年度	
	具体的取組	自己評価結果
確かな学力	①校内での授業研究・教材研究を進め、子どもが問題解決のために必要なことを自分なりに考え、自己を表現する力を身に付けることができるようにする。②学力・学習状況調査等を活用して実態を把握し、個に応じた指導を進める。③国語や算数等の知識・技能の習得を図るため、週3日朝15分間の学習時間帯を活用する。	今年度も校内での授業研究を進め、年間1人1回以上の授業公開を実施した。自己を表現する力を身に付けることができるように、ICT機器を活用しながら取り組んできた。また学習状況調査の分析は今年度行ったが、なかなか活用する状況には至っていない。漢字の書き取りや計算の反復練習等、朝15分の学習時間は大変有効だった。
豊かな心	①「道徳の時間」やスマイルハート(月の生活目標)等をきっかけにして、全教育活動を通して道徳教育を進める。②相手を思いやり、自己有用感を高めるために、異学年交流を計画的に取り入れ、振り返りを充実させ、実践につなげる。	スマイルハート(月の生活目標)をきっかけにして、児童とともに相手を思いやる行動について考えたり、思いのよさを認め合いりする活動をするなどして、児童の自己有用感を高めることができた。
健やかな体	①体育・保健の授業や健康会議(学校保健委員会)等の取組、給食指導を通して、児童が体の成長に必要なことを知るようにするとともに、保護者に生活習慣の改善についての情報を発信していく。②集金や委員会活動での機会をきっかけにして、継続的に体づくりに取り組む。	3年目のコロナ禍ではあったが、その中でたてわりの集金や委員会の活動(給食・図書・体育・健康)を継続的に進めることができた。感染症対策をしながら工夫を凝らし、健康や体力が向上するような活動をすることができた。毎月行っている食育朝指導が定着する興味の高まりにつながり、一人ひとりの栄養に関する知識もついてきている。
自分づくり(キャリア)教育	①「自分づくり(キャリア)教育」を活用し、自分自身の姿容や成長を自己評価できるようにする。②生活科や総合的な学習の時間を中心に、多様な人と関わる体験的な活動(本物)に触れる体験を通して、学びを生活や将来に結び付け、子どもが社会や集団の中で役割を意識したり、豊かな感性を磨いたりすることができるようにする。	「自分づくり(キャリア)教育」は年度当初や学期末の振り返りをしているが、子どもたちがその態度振り返りができるような形で、形式的になっていないので、来年度より活用できるように取り組んでいく必要がある。またコロナ禍の緩和により少しずつ体験的な活動を取り入れる機会が多くなり、子どもの学びに良い影響を与えている。
いじめへの対応	①月1回のいじめ防止対策委員会の他に、未然防止と実態把握を確実にを行うために、年数回のアンケートを適切な時期にとともに、日々の情報交換を密にし、早期対応、早期発見を目指す。②いじめなど子ども・保護者からの訴えには初期の段階から保護者・専任等と連携して対応する。	①様々なアンケートを実施することで、児童のSOSや心の変化を早期に把握することができた。②組織的に対応することで、多角的・多面的に対応策をたてることができた。
地域学校協働活動	①学校運営協議会を設置し、学校運営への参画や連携強化、保護者や地域と学校が一体となって児童の健全育成に取り組む。②支援委員会を中心に、地域学校コーディネーターと連携しながらボランティアを募り、子どもたちの学習環境の整備を進める。	学校運営協議会を設置し、学校の様子や取組を伝え、児童の健全育成のために協議を行った。コロナ禍3年目になり、少しずつ地域に出たり、地域の方々に来校していただいたりして学習することが増えてきた。今後は学校運営協議会や支援委員会の内容を職員間で共有することが大切である。
特別支援教育	①特別支援教育コーディネーターを中心に一人ひとりの教育的ニーズに応じたヒマラヤタイム(特別支援教室)の校内体制を整える。②支援を要する児童への効果的なアプローチを継続して行う。③校内での研修の機会を大切に、職員が同じ視点で児童を支援していく体制を整える。	①ヒマラヤタイムを実施することで個々の困りに応じた支援に寄り添うことができた。②個々の困りに寄り添うことができたので、一人ひとりに合った支援を行うことができた。③児童理解研修や人権研修を今年度も行い、児童の支援方法について共通理解の場を設けることができた。
情報教育	①ICT機器を日常的に様々な場面で使い、これまでの英語とICT機器を組み合わせることで、児童の学びへの意欲や自己表現力の向上を目指す。②職員がICTの活用に必要な資質・能力を身に付けられるように、職員研修の機会をつくる。③ICT支援員と連携し、校内のICT環境を整備する。	①ICTへの意欲が「特別なツール」から「日常的なツール」へと変わりつつある。トラブルエラーを簡単に繰り返すことが減ることで、学習意欲向上につながったと考えられる。②講師を招いた研修や授業研究を行うことで、教員の資質・能力が高まっている。③ICT環境の整備を計画的に進めることができた。
人材育成・組織運営(働き方)	①業務を通して、キャリアステージに応じた資質・能力を身に付けることができるようメンターチームや二部会・二委員会等を充実させる。②ワークライフバランスを考慮して、職員室アシスタントの活用、会議の精選及び主幹室の業務形態でしかなく内容を吟味することで、時間短縮など働き方改革を実施する。	職員間で業務に必要な知識やスキルを伝達していけるように、校務分掌を考えてきた。来年度に向けて、部会を統合整理したり、経験のある教員と経験の浅い教員間で指導や支援が密になるように見直ししていく。職員室アシスタントの活用が今年度で進んでいるので、双方が見直しをもって働けるようマニュアル化していく必要がある。
a25		
a15		
ブロック内研修後の見直し	コロナ禍も3年目ということで、ブロック内でも制限されていた教育活動が少しずつ以前のように戻ってきていることを感じる。行事の全面実施、生活科や総合的な学習の時間の中で、どの学校でも人と出会い、地域とともに学習することも増え、子どもたちの充実した学びにつながっている。ただそれだけでなく、各校でICT機器を活用した学習がどんどん取り入れられてきており、授業ははもろにも、普段の学習の中でも従来の取り組みが新たな発見や気づきを生み出し、大変有効であった。	
学校関係者評価	今年度より学校運営協議会を発足した。協議会では、授業参観を実施したり学校の様子や取組などを説明したりすることで、学校の教育活動について、理解を得ていたという点に励んだ。メンバーが「まちとともに歩む懇話会」の方々を中心に進めることが出来たので、許年度までの取り組みの継続の基、話し合いを進めることで、教育活動について理解をしていただけたことが多かった。学力については市の学力・学習状況調査を見ていただくことで、本校の児童の学力の様子について積極的な意見交換を行うことができた。	
中期取組目標振り返り	三年計画の一年目ということで、学校教育目標達成のための足がかりとなる振り返りを行った年である。それぞれの部や委員会が中心となり、保護者や学校運営協議会の反省を見取りながら反省を行うことで、具体的な到達度や課題となることを捉えることができた。到達し満足感が得られたことや来年度の課題について、一人ひとりの教職員が心に留め、来年度の教育活動に繋げていけるようにしていくことが大切であると考えている。そのために組織体制の確立を図り、活性化が図れるようにしていきたい。また、具体的な取組を行っていきけるよう会議や研究会の時間を確保できるようにしていきたい。	